
正義の味方

水無月五日

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

正義の味方

【Nコード】

N2824B

【作者名】

水無月五日

【あらすじ】

強いんだけど、どこか情けない。正義のヒーローなんだけど、なんか正義の味方っぽくない、そんなテンションだけで書いたお馬鹿なお話。今日も悪を成敗して警察に追われる！そんな正義の味方のお話です。何も考えずに読むべし！？

深夜四時半。

誰もが深い睡眠の中にあり、そんな時間帯でも働いている人間は居る。

二十四時間営業が当たり前となったコンビニエンスストア。利用客は昼や夜の比ではないが。

コンビニ店員Aは自分で持参した小説を置くの部屋で読みながら時間を潰していた。

「ふあああ、ねむ」

昼間寝ていたはずのだが、やはりこの時間に働いていると、妙に眠くなる。周囲が静かな事もあって余計に。

そんな時、来客を知らせるチャイムが鳴った。

「えっと、四時半か……少し眠かったから丁度良いかな」

読みかけの小説にしおりを挟んで、店員Aは事務所を出た。

「いらっしや……」

そう言った瞬間、目の前に光るものを突きつけられた。

「金をだせ！」

店員Aは即座に理解した。これは強盗なのだ。

店で何度か対強盗用の訓練を警察直々にレクチャーしてもらったのだが、実際にその現場に居合わせると怖い。

目の前の凶器は男の気分一つで自分に向かってくるかも知れない、目の前に凶器を突きつけられてコイツを逮捕しようとか、そういう気持ちにはならない。

早く、早く身の危険を回避しなければと、それだけを考えていた。「早くしろっ！」

フルフェイス、メットカバーはミラーレンズを使用しており、ミラーレンズには何故か手を上げている店員A、自分自身の姿しか見えない。そして強盗の声を聞くに多分マスクをしていて、強盗の声

はどこか鼻声のような声に聞こえた。

キラリと店の照明で光る包丁。

もう店の利益とかそんなのどうでも良いから、自分の身を守らなければと思っていた店員Aは男がレジカウンターに置いた鞆にお金を入れることを決意した。

『人は誰しもきついと思いついながら働いている！ それを脅し、奪い取るとは不届き千万！』

ういーんと入り口の自動ドアが開き、フルフェイスをした男がもう一人入ってきた。

同じ店に同じ時間に二人も強盗が入ってくるなど考えてもいなかった店員Aはパニックに陥った。

「きゃああああつ！！強盗が二人！」

『待て、お嬢さん！ 俺は強盗ではない！ 正義の味方、ジャステイスマンだ！』

「待て、お嬢さん！ あんなキチ男がと一緒にされちゃ困る！」
フルフェイスを被った男二人は同じように手を突き出し「ちよつと、待った」のポーズをとる。

店員Aは交互に二人を見渡し、がしりと一人のフルフェイス男の手を取った。

「ごめんなさい、強盗さん！ 確かにあんなキチ男と一緒にされちゃ困りますわね！」

「謝る必要なんか無いさ、解ってくれただけで十分さ！」

二人は叫びながら手をしっかりと握っていた。

この状況に一番困惑したのは、ジャステイスマン、彼自身だったろう。

『待て、何故か知らんが私を無視して勝手に話を進めるな！』

ジャステイスマンがこう叫ぶのも無理は無い。

正義の味方として強盗をやっつけに来て、店員さんを助けるつもりが、いつの間にか自分が悪役になっていると言う事実。

「うちらああ！！！」

包丁を振りかざし、ジャステイスマンへと襲い掛かる強盗。

「フン、ジャステイススカイキックッ!!」

ジャステイスマンはそう叫ぶと一歩後ろへバックステップし、蹴り上げて男の身体を浮かす。

「ジャステイスマシガンキックッ!!」

浮かした男の身体を空中で何度も蹴るジャステイスマン。某世紀末救世主伝説である蹴り技のようだ。

「ジャステイスファイニッシュキイイツクラ!!」

ダダダと蹴っていた足を一度引き、回し蹴りを放つジャステイスマン。

「おぐばあ!!」

その蹴りを喰らい、強盗は空中を飛び、商品棚に身体を突っ込んで沈黙した。

「さあ、もう大丈夫だ、お嬢さん」

フルフェイスマスクでジャステイスマンの表情はわからないが、声のトーンやこの場面からして、さぞこやかに微笑んでいるだろう。

「いやああ、強盗さああんツ!!」

頭を抱え、大粒の涙を流しながら店員Aは叫んだ。

「ちよ、おま……」

ジャステイスマンが口を開いた時、サイレンの音がコンビニエンスストアに近づいてきた。

「ち、時間か！ 正義の味方はいつも君の傍に!!」

そう言い残してジャステイスマンは自動ドアの前に立った。

「む、しまった！ 冷やかしだけでは帰れんな!!」

ジャステイスマンは買い物が手に取り、テレビ情報誌をかごの中に入れ、ジュースの冷蔵庫の前で、スポーツ飲料水か、炭酸飲料水のどちらを買うか悩み、結局炭酸飲料水をかごの中に入れ、ポテトチップスのうす塩味をかごに入れ、レジに差し出した。

「え、えっと、三百八十円が一点、百五十円が一点、百四十七円が

一点…合計六百七十七円になります」

『千円から……おっと、七円あります』

ジャステイスマンは財布を取り出し、千とんで七円をレジにおいて、お釣りの三百三十円とレシートを見比べて、財布にお金を仕舞い込み、買い物袋を手に提げて店を出た。

「ご、強盗ッ！！」

ひゅつと店員Aはカラーボールをジャステイスマンに投げた。

「貴様、とまれえ！！」

外では警官らしき人の声が聞こえている。

『待て、私は怪しいものではない！』

「その荷物はなんだ！」

『さっきコンビニで買いました！これがレシートです！』

どうやら、ジャステイスマンは警官と何かを話しているようだ。

こうして都会の夜は更けてゆく。

場所は変わって、某賃貸ビルの一室。

「ついにこのときが来ました、Dr. デス（どくたーです）計画は滞りなく」

『ふむ、頼もしいぞ、ヘルレディー！（へるれでいー）』

その一室、明らかに基準蛍光量とかを無視した部屋で、薄暗く部屋の中央奥に設置された特撮番組とかでよくある、大ボスのシルエツトだけが移しだされていた。

そんな時、チャイムが鳴り響いた。

『来たな、ふははは、ふははは！！』

Dr. デスは高笑いを上げながら、ヘルレディーに指示を出す。

「徳田さん、新聞です」

「あ、いつもご苦労さまです」

ぺこりと会釈し、ヘルレディーは新聞配達屋から新聞を受け取った。

『ふははは、明日はこの新聞の一面に我等の計画がッ！！』

「Dr. デス！ これをご覧ください！」
ヘルレディーは新聞の一面をDr. デスに見せた。
『む、これはいかな、早く計画を実行に移せ！』
「ははあ！！」

場所は変わって、県立高校の一年一組

「あーそついやあのコンビニ、今朝方強盗が入ったんだってよ？」
「知ってる！ 今朝ニュースで見た！ ほんとビックリしたよ！
急に知ってる場所がTVに写るんだもん！」

県立高校の学校内では、今朝方にコンビニ強盗が入ったという噂
で話題は持ちきりだった。

「おはよう」

大きく欠伸をしながら寝ぼけ気味の男が教室に入ってきた。

「オーウ、おはよう、一途いちず」

オッスとクラスメイトと会話をしながら、一途は眠そうに席に座
った。

「なあなあ、一途、ニュース見た？」

「いんにゃ。今日はギリギリまで寝ていたからね」

「お前はいつつもそれだろ！ 深夜のエロイ番組ばっか見るなって
！」

クラスメイトはそう言って笑った。

しばらくすると担任が出席簿を持って教室に入ってきた。

「えっと、皆も知ってると思うが、今朝方コンビニに強盗が入った。
そついうわけで、夜中出歩か無いように」

そつと言って授業を開始する。

「ねえ、一途君」

名前を呼ばれて一途は隣の席に目を向けた。

「ん、どうしたの？ 長須ながすみ深さん？」

「ねえねえ、こついう非常時の時ってドキドキしない？ ねえ、留
美？」

長須深は後ろの席の留美と呼ばれた女の子に話を振った。

「そ、そんな…ドキドキなんかしないよ…寧ろ怖いし」

「まあ、そうだろうね、坂上坂さんさかがみさかバイトしてるから夜とか怖いでしょう？」

「バイト帰り、襲われ無いようにしなきゃね、留美」

一途と長須深の話を聞いた坂上坂は不安そうな表情になった。

「もう、ヘンな事言わないでよ！」

怖がる坂上坂の姿を見て、長須深は満足そうに笑った。

どうやら、長須深の目的は坂上坂を怖がらせることにあっただよう
だ。

「もう、長須深さんがヘンなこと言うから、帰りが怖くなっちゃった」

坂上坂はバイトを終え、家への帰路を急いでいた。

辺りは言うまでも無く真っ暗で、街灯の光が所々あるものの、それも一時の気休めでしかなく、その不気味に周囲を照らす街灯が帰って恐怖心を煽る。

早く家に帰らなければと思っっている時に、それは急に坂上坂の目に入った。

路上の街灯下で苦しそうに呻く老人が居た。

大方飲みすぎなのだろうけど、万一その老人が危ない状態だった
りしたなら…と考えると無視は出来ない。

坂上坂は意を決して老人に声を掛けた。

「あ、あの…大丈夫ですか？」

「す、すまんね……」

老人は苦しそうに声を上げた。

老人の周囲からは酒の匂いはせず、どうやら本当に具合が悪かつ
たようだ。

「あ、あの…びよ、病院呼びましようか？」

「いや、心配には及ばんよ……」

そう言うと、メキメキと音を立てて、老人の身体が歪んだ。

口は避け、頭部からはとがった耳が出て、背中は丸くなり、身体は黒い毛で覆われた。腰の辺りからは尻尾がズボンを破り飛び出た。「き、きやああああッ!!」

大声をあげ、一目散に逃げ出す坂上坂。

そんな彼女を追うように、老人……いや、黒猫のような化け物は駆け出した。

「はあ、はあ!!」

全速力でずっと走ってる、振り返らないで。いや、振り返れないのだ。

心配が近くなっているのはわかる。

それこそ次にあの化け物の姿を見たら身体の自由が聞かなくなるのを坂上坂は解っているからだ。

恐怖で身体がこわばり、腰が抜けてしまう。生きたいと望むなら振り返らずにただ走るしかない。

「あっ!!」

靴紐を踏んでしまい、バランスを崩して坂上坂は空中へ踊り出るとたつと派手に地面とキスをした。

とつさに付いた手に鋭い痛みが走る。膝にも痛みが走る。

駄目だ、もう立ち上がれない。

一度止まってしまった足は、もう何があっても動きそうに無い。

「おやおや、大丈夫ですか？ お嬢さん」

スツと坂上坂の目の前に手を差し出される。

良かった、助かったと安堵のため息をついた坂上坂はその手の主を見る。

ロングコートに身を包み、映画とかでヨーロッパの紳士が被っているような帽子を被ったモノが其処に立っていた。

一つ、違つとこを上げるのであれば二足歩行の猫だということだ。

「き、きやああああッ!!」

咄嗟に坂上坂はその二足歩行の猫から離れようとするが、腰が抜

け、尻を引きずる様にして下がるしか出来なかった。

『其処までにしておけ!』

暗闇に、何処からか声が響き渡る。

きよるきよると周囲を見渡す二足歩行猫と坂上坂。

声のした方向には、街灯の上で腕を組んでこちらを見下ろしている人物が居た。

夜風に長いマフラーがはためいている。

「き、貴様一体!？」

二足歩行猫が街灯上の人影に声を掛ける。

『強きを挫き、弱きを助け、正義を示す!』

人影はそう叫ぶと、人間とは思えないジャンプ力で街灯からジャンプし、錐揉み上に二足歩行猫へと狙いを定めた。

『ジャステイス、ローリングキイイツクツ!!』

高いところからの錐揉みでの蹴りを喰らった二足歩行猫は大きく吹き飛んだ。

「き、貴様、一体何者!？」

『悪に名乗る名前はない!!』

フラフラと立ち上がる二足歩行猫。そんな猫をほおって置いて、

男は坂上坂に手を差し伸べた。

『怪我はないかい、お嬢さん』

暗闇ではつきりとその姿は捉えられないが、手を差し伸べている男は、全身をフィットするようなボディスーツに身を包み、頭部をバイクのヘルメットとは違う、特撮ヒーローが被っただけのようなヘルメットを被っていた。

まるで、まるでこれは特撮番組のようではないかと坂上坂は口を開けて考えていた。

「ゆ、油断して一撃を喰らったが、次は喰らわないニヤ!」

そう言つと、二足歩行猫は両手を地面に付いた。

四足歩行になると語尾に『ニヤ』が付くんだなあつと坂上坂は冷静に分析していた。

『ふ、来なさい、ニヤンコ君!』

ビシツと四足歩行猫に拳を突きつけ、特撮ヒーローはそう言った。
「私は『紳士キヤット』だニヤ!」

『む、名を名乗ったか! 私はジャステイスマン! 正義の化身だ!』

微妙に礼儀正しいジャステイスマンを見ながら、坂上坂は紳士キヤットを見て『どの辺りが紳士だろう?』と紳士の由来を探した。

「じゃああああッ!」

紳士キヤットは雄たけびを上げながらジャステイスマンに向かって駆け出した。

紳士キヤットは四足歩行で走り始めたのだが、数歩走ったところで二足歩行にチェンジした。

坂上坂はそんな紳士キヤットの動きを見て、人類の進化を思い浮かべた。それと同時に、四足歩行で駆け出す必要はあるのだろうか? と密かな疑問を抱いた。

『ジャステイスミリアアア!』

そう叫ぶと、ジャステイスマンは両手を突き出した。

突き出した両手の前に何語かわからない文字が浮かび、それが紋章のようになってグルグルと回り始める。

次の瞬間、紳士キヤットと、ジャステイスミラーがぶつかり合い、激しい光を浮かべる。

「にゃんと!」

『あつはつは、ジャステイスミラーは正義の盾さ!』

二足歩行でも猫っぽい喋り方をする紳士キヤットに、坂上坂は『ワザとやってるんじゃないだろうか』と密かな疑問を浮かべたのは言うまでも無い。

「其処までにしなさい、紳士キヤット!」

「へ、ヘルレディー様!」

ヘルレディーと姿をみたたん、紳士キヤットは平伏した。

「ふん、アンタ、人間にしては良くやるわね! 名を聞こう!」

ヘルレディーは怪しく笑い、ジャステイスマンへ名前を聞く。
『ジャステイスマン』

くるりとヘルレディーに背を向けて答えた。
坂上坂はそんなジャステイスマンを見て『多分シーンを間違えてる』と思っただ。

現状のシーンとしては好敵手として認めようという話の流れなのだが、ジャステイスマンの取った行動は、助けられた人がジャステイスマンの名前を聞いた流れなのだ。

「その名前、覚えてわ」

そういい残して、ヘルレディーと紳士キャットは虚空に消えた。

『さて、お嬢さん。怪我は無いかい？』

ジャステイスマンは坂上坂に手を差し伸べながら言った。無駄に長いマフラーがなびいている。

「へ、あ、はい…大丈夫です……」

『うお、怪我をしているではないか！ 少し待っている！』
坂上坂の膝を見てジャステイスマンは叫ぶ。

そして全速力でその場所を離れる。

数分後、数台のパトカーに追われて、ジャステイスマンは坂上坂の元に帰ってきた。

『お嬢さん、かすり傷一つでも大事に至るんだぜ？』

そう言っただけジャステイスマンは背中を向けて駆け出した。

緑色のカラーボールをぶつけられ、警察のパトカーに追われながらも、尋常ではないスピードで駆け抜けてゆくジャステイスマンの姿はどこか、遊園地で悪戯鬼に虐められるマスケットのようだった。

「ジャス…ティスマン……」

ボソリと坂上坂はその名前を復唱した。

翌日、膝小僧にガーゼを貼り付けた坂上坂の姿を見て、長須深は驚きの声をあげた。

「留美ッ！ あんたどうしたのよ！ その怪我ッ！」

「昨日し……」

紳士キャットに追いかけられて……と危うく言いそうになった坂上坂は慌てて、夜道でこけたと言う事にした。

そんな坂上坂を長須深は笑った。

笑われながらも坂上坂は、昨日の出来事は夢ではなかったと、自分の身体に刻み込まれた傷を見て改めて再認識した。

「でも凄く痛そうだよ、足大丈夫かい？ 坂上坂さん」

一途とその友人も坂上坂の怪我を心配して、坂上坂の机をぐるりと囲んだ。

注目される事が苦手な坂上坂は顔を赤らめて、俯いた。

「あーあ、でも勿体無いわねえ、体育が出来ないなんてさ」

「長須深さんは筋肉馬鹿だもんね」

「おら、一途いっぺん死なすぞこら？」

「しません……」

そんなやり取りを微笑みながら見ていた坂上坂だが、確か今週は女子体育教師の出張で、体育の授業は男子と合同だったような記憶があった。

記憶の糸を辿ってみると、やはりそうで、男子と何かスポーツするのはかなり苦手というか怖い坂上坂は、少しだけ紳士キャットに感謝した。

実際に見学してみると案外面白いものではなく、坂上坂は男女対抗のスパイク無しのバレーを見学していた。

スパイクが無いバレーというのは、砂浜とかで楽しむビーチボールみたいで、坂上坂はこれならば参加したかったなあと思えて思った。

そんな坂上坂はグラウンドの一角に学生とは思えない姿を捉えた。その姿の主は、一直線にこちらに向かってきている。

よく見ると、明らかに学生とは思えない格好と外見をしていた。

「くんかくんか……こいつです」

くんくんと坂上坂の匂いをかいで男は口を開いた。

露骨に嫌そうな顔をしながら、坂上坂はバレエに集中して、かなり危機的状况にある自分を助けられないクラスメイトを怨みながら、坂上坂は勇気を出してその男に話しかける。

「此処は関係者以外立ち入り禁止ですよ」

男は坂上坂の話聞いて、ニヤリと微笑を浮かべた。

「お嬢さん、私をもうお忘れかい」

そう言う男はメキメキと音を立てて、坂上坂の目の前で変身した。

「ふ、紳士キヤットは狙った獲物は逃さないのさ、まさに名前の通りだね」

後から来た女、その女の格好はこれまた場所…会場を間違えたレイヤーのような気がしてならない坂上坂だったが、それよりも猫は結構あきらめやすい性格だし、紳士はしつこくないんだけど、考え、名前の由来は一体何処から来たんだろうと考えていた。

「そつちボールがいったぞお！」

クラスメイトの声が聞こえたが、その時には既に遅く、誰かがトスカレシーブをミスったのか、物凄い速度で坂上坂の元へと向かってきていた。

「にゃん！」

本能がそうさせたのか、いや、そうとしか思えない動きで、紳士キヤットは向かってくるボールに掛け出した。

そして、見事に顔面でレシーブし、赤い噴水を噴出しながら倒れていった。

「うお、おっさんが倒れた！　　というかこのおっさんかなり毛深いぞ！？」

ざわざわと坂上坂の周囲に人が集まる。

びくびくと痙攣している紳士キヤット。そんな姿を見て、これは本当に怪人なんだろうかと坂上坂は思った。

「くそ、油断したニヤ！」

怪人、紳士キヤットの回復力は凄まじく、先ほどまで痙攣してい

た事など無かったかのように立ち上がった。

「おお、おっさんじゃないぞ？ 喋る猫だ！ すっげーッ！！」

クラスメイト達は日本語を喋る紳士キャットにあれこれと質問をしている。

そんな呑気なクラスメイト達を見て、坂上坂は色々な疑問が頭に浮かぶ自分は、難しく考えて生きすぎているんだろうかと自分の生活を振り返ってみた。

クラスメイト達にちやほやされて、当初の目的を忘れていた紳士キャットだが、急に思い出した用に声をあげた。

「私はお前達を改造し、紳士キャットジュニアにし、全世界の人間達を紳士キャットジュニアにし、巨大な紳士キャットファミリーを作るのニャー！！」

本当に壮大な計画だなあつと坂上坂は感心した。

「まずは手始めに貴様らから改造してやるニャー！」

そう言つと紳士キャットはグルグルと回り始め、両手……いや前足を横に広げ、その鋭利なツメで周囲に居た生徒達を斬りつけはじめた。

急な展開に、生徒達はパニックに陥った。

グラウンドは数分で怪我人の山となった。

幸いな事に、皆軽傷というのが唯一の救いか。

「にははははは、このツメに切り裂かれた者達は私のような身体になるのニャー！！」

どうやら本当に変身してしまつようで、切り裂かれた生徒達は、紳士キャットの話は耳に届いてなく、ゆらりと立ち上がり、金属バットなどの凶器を手にした。

「いつてえ… テメエ、何すんだよ！」

数人の凶器を持った学生が紳士キャットを取り囲む。

『あつはつは、悪の居る所に正義あり！』

唐突に周囲にこだまする声。周囲の人間達はその声の主を探そうと周囲を見渡す。

「あつー！」

一人の生徒が、校舎の時計台の避雷針の上ではためくマフラーの姿を見つけた。

「とおうー！」

避雷針上のマフラー男は優雅にジャンプし、人間とは思えないジャンプ力で、しゅたつとグラウンドに降り立った。

「さあ、君たち、後は私の仕事だ、君たちは下がってなさい！」

「ばーんと手を突き出し、腰を落とし、登場シーンを決めるジャスティスマン。」

煙と何とかは高いところが好きと言うことわざがあったような気がする……とジャスティスマンを見て坂上坂は思った。

「ああ？ 何ふざけてやがる、このコスプレ野郎があつー！」

「う、うわ、何をする！ 君たち！」

生徒達に囲まれてたこ殴りにされる正義の味方。

「く、くそう、わかたぞ！ 紳士キャット！ お前生徒達を操っているな！ 許せん！」

「いや、まだ洗脳ウイルスが全身に行き渡るまで後数分は必要ニヤ。それはそいつらの意思だニヤ」

「そんな……」

困らばこぼこにしていた生徒達の巻き上げる砂塵が風に流されて消える時、その砂塵の中心に横たわっていた正義の味方の姿があった。

その勇姿を僕らは忘れない、ありがとう、ジャスティスマン！

地球の平和は僕らが守るよ！ と生徒達は真昼の空に誓うのであった。

「正義の味方 完」

「ちよつとまてえー！ まだ私は死んでない！」

ジャスティスマンは絶叫し、よろよると立ち上がった。

そんなジャスティスマンの姿を見てヘルレディーは満足そうに手

を叩いた。

「流石だな！ ジャスミンマン！」

「ジャステイスマンだ！」

それを合図としたのか、ジャステイスマンと紳士キャットは互いに駆け出した。

「はっ」

ジャステイスマンの短い掛け声の後、マフラーがなびき、ジャステイスマンから線が延びる。

「ニヤッ！」

紳士キャットはギリギリのところまで態勢をかがめ、その蹴りを避ける。

蹴りを避けられたところでジャステイスマンは大きくバランスを崩す。そのチャンスに紳士キャットが見逃すはずもなかった。

「にやあー！」

紳士キャットは鋭い爪をジャステイスマンに走らせる。

「むん！」

ジャステイスマンは手首いや、足首を捕まえ、その攻撃を受け止める。

攻撃を受け止めたところでジャステイスマンは足を一度引き、思いつき突き出した。足が身体に触れる瞬間、掴んでいた腕を放す。

「にやあっ！！！」

ごろごろと吹き飛ぶ紳士キャット。

そんな紳士キャットの姿を見ながら、ジャステイスマンは腰を落とし、戦闘態勢を取る。

自らの怪人の危機でもありながら、何も手を出さないヘルレディを危険視したジャステイスマンだった。

「流石ね、ジャステイスマン！ でも、これからその勢いは何処まで持つかしら？」

「何だと！？」

ゆらりと数人の生徒がジャステイスマンを取り囲んだ。

先ほどぼこぼこにされたことが怖いのか、ジャステイスマンはビクリとした。

「ふふ、何を言っても無駄ね、そいつ等は紳士キャットの洗脳ウイルスにやられたわ、見なさい、頭を！」

「なんと！ 耳が！！」

ジャステイスマンは生徒達の頭に生えた猫耳を見ている。

一人しゃがんでいた坂上坂は紳士キャットの爪で引っかかれなかったので、洗脳されていない状態でこの戦闘を見守っていた。

「いきなさい！ ジャステイスマンを倒せ！」

しゃあああと生徒達は一齐にジャステイスマンに飛び掛る。

「クソ、卑怯な手を！」

ジャステイスマンは生徒達の攻撃を避けながら叫ぶ。

生徒Aは大きく金属バットを振りかぶってジャステイスマンに駆けて来た。

「クソ、これではいかん！ 手が出せん！」

ジャステイスマンは大きく手を引き、前に突き出した。

そして足を振り、振り上げた足が地面に付くと、それをばねに空中に飛び、片足を振る。それと同時に身体を捻りながら空中で回転し、逆立ちをする状態で着地、足を広げ、腕を曲げてコマのように回る。

勿論、この全ての行動は生徒に被害をもたらしているのだが。

ヘルレディーと紳士キャットの目の前を元気よく生徒が飛来してゆく。

「ちょ、ちょっと、アンタ！ ほんとうに正義の味方なの！？」

「そうだニヤ！ お前は鬼だニヤ！」

「俺はジャステイスマンだ！」

「なるほど！」

「にやるほど！」

この三人のやり取りを見ていた坂上坂は、ああ、基本的にこの三人は頭がおかしいんだなっと思った。

「よし、邪魔者もいなくなつたところでリターンマツチだ！」

ジャステイスマンは男だろうが女だろうが関係無しに殴り、蹴り飛ばし、生徒達をグラウンドに横たわらせている。

「クソ、必殺技をお見舞いするニヤ！」

自ら必殺技を出すと宣言する紳士キャットを見て坂上坂は黙って出せば良いのにとため息をついた。

「必殺！ 猫まつしぐらー！！」

二足歩行でぶんぶんと両手を…両前足を振り回しながらジャステイスマンに向かう紳士キャットだった。

かなり客観的にこの戦闘を見ている坂上坂は紳士キャットの必殺技は必殺というよりただの錯乱者にしか見えなかった。

「なんと！ クソ！」

必殺技という響きだけでなにやらかなり焦ってるジャステイスマンだった。

「じゃ、ジャステイスマンさん！何か攻撃をしなきゃ！」

坂上坂はおろおろとするジャステイスマンに指示を出した。

「そ、そうか、攻撃をして奴の攻撃を抑えなくては！」

ジャステイスマンは自分のやるべき事を気が付いたのか、なにやらぶつぶつと呟きだした。

「行くぞ！ ハンドガン！」

腕のカバーみたいなのが上に上がり、右手から銃口のようなものが顔を出す。

ウィーンという銃口の回転音と共に、無数の弾丸が発射される。

「うお、いけね！ 右手はガトリングガンだった！」

ジャステイスマンに駆け寄ろうとしている紳士キャット。それをガトリングガンで迎え撃つジャステイスマン。

本気でこれは紳士キャットが錯乱者としか思えない。

「ま、まだまだ私は負けないのニヤ！」

何発も弾を喰らいながらも前へと進む紳士キャット。

その姿はどこか、男らしいものに見える。

『その意気や良し！ エネルギーチャージ、オールグリーン……ス
タンバイオツケエ！』

ジャステイスマンがそう言うつと肩や足の無意味な装飾のバインダ
ーのようなものが開く。

背中についているわっかの様な飾りもグルグルと拘束回転をする。
ガバッと胸のカバーが左右にズれてその隙間になにか光が集まっ
ている。

背中と肩と足から物凄い熱量が放出される。

熱による視界の歪みがまるで、ジャステイスマンが気を出してい
るように見える。

『喰らえ、ジャステイスフラアアアアアアアッシュツ！！』

轟音をたててジャステイスマンの胸から物凄い光が放出される。

「ふあ、ファミリーは不滅だニヤアアアアアッ！！」

光に飲み込まれた紳士キャットの断末魔が周囲にこたました。

ジャステイスフラッシュを打ち終わつたジャステイスマンは黄昏
るように肩と足と背中の中の輪のようなものから煙を出している。

どうやらスーツ内に籠つた熱を放出しているようだ。

「クソ、紳士キャットが！ 覚えていろ！ ジャステイスマン！」

ヘルレディはお決まりとも言える捨て台詞を履き捨てて虚空に消
える。

『ふ、正義は必ず勝つのさ！』

ジャステイスマンもそう言うつと、軽快なフットワークで走り去っ
た。

ぽつんと取り残される形となつた坂上坂はこれからどうすれば良
いのだろう？ とため息をついた。

「あーもう最悪！ 何でこんな目にあわなきゃいけないのよ！」

事件が解決の方向に向かったのは良いことだが、生徒達は怪我を
していた。

この事件は謎の突風によるカマイタチとして扱われ、各々がその

目で見た紳士キャットやジャスティスマンはこの事件とは全く関係ないという事になった。

「あんまり騒ぐと傷が痛むよ?」

坂上坂は騒ぎ立てる長須深をなだめる。

「そうだよ、安静にしなきゃ」

一途も坂上坂と一緒にあって長須深をなだめる。

「大体なんで一途は無傷なのよ?」

長須深は納得が行かない様子で一途に詰め寄る。

「いや、なんか危なそうだったから隠れてた」

「うーわ、男のクセに情けないわねー」

「でも凄かったなあ……」

「何が? 留美?」

「何が凄いの? 坂上坂さん」

一斉に疑問の眼差しを向ける長須深と一途。

こうしてジャスティスマンと紳士キャットとの死闘の目撃者は坂上坂だけで、その死闘が語られることはない。

夜九時半。

人気がない路地裏で事件は起こった。

「おら、ちゃんと金を持ってきたんだろうなあ?」

「う、うん」

柄の悪そうな学生が、気弱そうな学生を取り囲む。

気弱そうな学生は鞆から財布を出すと、それを柄の悪そうな学生が取り上げた。

「人のお金を巻き上げ、自分らは楽をして遊び呆ける警察は許しても俺が許さん!」

「だ、誰だ!?!」

柄の悪そうな学生は周囲を見渡す。

街灯の上にマフラーをはためかせ、その人影はとんだ。

「ジャスティスカイダイブ!」

『ジャステイスアッパー！』

『ジャステイスブロー！』

ジャステイスマンは一瞬のうちに学生を打ち倒し、リーダー格の学生から財布を取り返した。

『ほら、これで大丈夫。時には立ち向かう勇気を！』

「おまわりさん、アイツです！ 怪しい奴は！」

「うお、アイツ学生にしてカツアゲしている！ 許せん！ 逮捕だ！」

『ちよ、おまつ……クソ、そういうわけで少年！ 勇気を！』

そう言つと男は財布を少年に投げ渡し、颯爽と駆け出した。

「ちよつとまたんかああ！！！」

警官に怒号を浴びながらも影は深夜の街に消えていった。

ジャステイスマンは今日も正義の味方とは思えない扱いを受けながら、正義の心を見失わず頑張っているのだ！

夜道で何か声が聞こえたら、周囲を見渡して見ましよう。

もしかしたら、街灯の上とかに彼がいるかもしれない。

頑張れジャステイスマン！ 悪を討ち滅ぼすその日まで！

(後書き)

なんか気分転換に書いてみたお話でした。

ノリとしては一昔前の特撮番組をイメージしました。

ちよつとだったらと書き過ぎた感じもしますが……

あと、何がDr、ヘルの目的なのか、ジャスティスマンは何で正義の味方なのか、そういう深いところは全く考えてませんので深読みしても何にもありません(笑)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2824b/>

正義の味方

2008年11月7日07時30分発行